

「こちら原発取材班」

2022年04月26日

「東京新聞」は、論調を原発反対の立場に立って展開している。「こちら原発取材班」は、原発事故から発してきている諸問題、事故後の現場について、避難者の現状、廃炉への進展などを長期連載している。どれも、先行きの見えない息苦しい報告である。

4月18日の「こちら原発取材班」は「避難18ヶ月 短歌に喪失の叫び」とタイトルされた記事が掲載されていた。原発事故現場から、4.5km離れた福島県大熊町で生まれ育った歌人の佐藤祐禎さんは避難後、病に倒れるまでの18ヶ月間に3000首以上の短歌を詠んでいた。それは、故郷を奪われたことの悲しみ、政府や東電の心無い対応への怒りなど、絶望と無力感に打ちひしがれている心の叫びを詠った短歌である。佐藤さんは専業農家で、短歌は50代になって始めたという。佐藤さんの死後、遺族がノートやパソコンに遺された短歌を見つけ、歌人仲間が歌集『再び還らず』を編集、出版した。

「避難18ヶ月 短歌に喪失の叫び」に転載されている中から10首を紹介し、私のコメントを書き添えたい。日々の思いを率直に詠っている。〈大熊のにんげん故に原発を詠まねばならず後の世のため〉大熊町で生まれ育った人間だから、原発の事実を後世の人のために、書き遺しておかなければならない。人は忘却することによって救われることもあるが、忘れてはいけないこともある。佐藤さんは原発事故を忘れてはならないと詠った。〈七人の家族が五箇所に分れて住みケイタイに日々の言葉をつなぐ〉大熊町は、全町避難を強いられたので、家族はバラバラに分れて住んでいる。日々ケイタイ電話で消息を伝え合っている。何と寂しいことか。〈北を指す雲よ大熊に到りなば待つ人多しと声こぼしゆけ〉佐藤さんは南に避難したのであろう。北に流れる雲に向かって、大熊町に帰還を望む人が多いと伝えてくれと、雲に思いを託している。〈ああわれら難民とよばれる身なりよとある時はつとわが気付きたり〉避難民と難民は違うが、佐藤さんは、自分たちは難民であると気付かされた。故郷を喪失し、帰還できない身の上を嘆いている。〈こんな時でなければ会へないと口々に懐かしみいふ葬りといふに〉久しぶりに会えたのは葬式の時であった。懐かしさが込み上げ、口々に昔話に花がさく。原発事故は人を非情に引き裂いたのである。放射能の恐怖を詠んでいる。〈羽根あらば我が家の空を飛びたしよ放射能などもはや懼れず〉放射能を懼れず、羽根をつけて、自宅の上を飛び交わしたい。事故さえなければという思いである。放射能は、現在の科学では処理する術はない。原発を稼働させれば、廃棄物が出てくる。事故を起こした原発を廃炉にしよう計画しているが、何万トンもの廃棄物が出る。それらを何処に処理するかも全く決まっていない。原発事故を取材し続けたジャーナリストの吉野実氏は『「廃炉」という幻想』で、廃炉工程は絶対に不可能と書いている。〈原発の危険訴へて来しことも一切空となりけるかな〉原発は危険であるとの声は聞かれず、再稼働の方向に走っている。〈原発への恨みつらみも詠みつくしこんどは本当の歌を詠まむぞ〉原発で受けた苦難を詠ってきたが、もう普通の生活歌を詠いたいと言う。〈原発の歌はそろそろ止めようと思へどそこより一歩も出でず〉原発の歌は止めようと思うが、出て来る歌は原発の苦しさを詠う歌ばかりである。〈原発と国に立ち向かう気力なく彼らのいふままに流されゆかむ〉原発関係の本や情報に関して、原発と国の誠意ある対応を聞いたことがない。言いなりに流されざるを得ない佐藤さんは耐え難い無力観に襲われ、心は原発の悲劇でいっぱいである。避難者は、11年を過ぎた現在でも3万人以上おられる。皆、佐藤さんと同じ思いであろう。事故を起こす前に原発は廃棄すべきである。